

●チーム・コヤーラ主催「創作人形展」

～それからの人形たち～

2013 年 9 月 24 日（火）～9 月 29 日（日）

会場：NHK ふれあいホールギャラリー

チーム・コヤーラ公募展のその後を追う展覧会

ゲスト作家やチーム・コヤーラも出展！

本展は出品者や参観者が創作人形について考える展覧会です。会期中のメインイベントは「公開講評会」。展示会場でゲスト作家とチーム・コヤーラが出品者立ち会いのもとで作品を公開講評、会場の参観者も交え、自由に意見交換を行います。優劣や賞を競うのではなく、それぞれの作品に沿って、人形や創作について皆で考える講評会です。野次馬大歓迎！

◎公開講評会 各枠 3 名、合計 6 名 講評作品は期間中展示します。

第 1 回 9 月 24 日（火） 15：00～17：00

講評者 三輪輝子（予定）、よねやまりゅう

第 2 回 9 月 29 日（日） 13：00～15：00

講評者 つじとしゆき（月光社）、井桁裕子



本展趣旨にご賛同頂いたゲスト
出品作家(敬称略 6月10日現在)

講評作家（よねやまりゅう、三輪輝子、井桁裕子、月光社）
イフンケ、山吉由利子、高橋操、佐藤美穂、くるはらきみ、安達忠良、Noe、戸田和子、知神けい子、三上りあん、矢部藤子

昨年会場写真より

●チーム・コヤーラ秋のモニターツアー

「ラ・スペコラ」、シュヴァル理想宮殿、ガウディ、ギーガ、アウトサイダーアートを満喫！

あのマニアクアートを巡るヨーロッパの旅

チーム・コヤーラでは現代のアーティストに刺激を与え続ける偉大なアーティストの足跡を辿るモニターツアーを 10～11 月の間に計画しています。会員やスタッフ、ご紹介のある方はどなたでも参加出来ます。

【サンプルプラン】

イタリア、スイス、フランス、スペイン 約 10 日間

・訪問先（日程と予算に応じて変更あり）

フィレンツェ大学動植物博物館「ラ・スコペラ」（イタリア）、ギーガ美術館・アール・ブリュット美術館（スイス）、サグラダ・ファミリア他バルセロナのガウディ建築物（スペイン）、郵便夫シュヴァルの理想宮殿（フランス）

・最少催行人数 5 人 定員 15 人

・予算 30～35 万円前後（人数によって変わります）

・時期 2013 年 10～11 月のあいだ

公開講評作品公募！

【応募条件】

・2012 年創作人形公募展の受賞者以外の方。会員・非会員は問いません。

・公開講評作品も会期中展示します（委託搬出入あり）。

・公開講評会で応募した枠（第 1 回 or 第 2 回）には、必ず本人が同席すること

・出品料（審査通過した方のみ）

1 点 5000 円（2 点まで可。追加 3000 円）

【選考基準】

独自性・ユニークさのほか、表現内容と他応募作品とのバランスを見て決定させていただきます。

【応募方法】×切 7 月 31 日必着

以下の書類をチーム・コヤーラ事務局まで「公開講評」と明記の上郵送してください。

・写真

「展示作品の写真（無背景 全体とアップ）」→2L サイズ、またはハガキサイズ

・以下を A4 の紙に記載

応募者名／〒番号と住所／電話番号／email

作品タイトル／サイズ／本体構造／素材／展示に関する特記事項

※展示装飾品・備品については、スタンドや椅子、または本体表現の一部である場合を除き、認めません。

選考はチーム・コヤーラが行い、結果は 8 月 10 日までに全応募者に郵送いたします。

7 月下旬には旅程と確定予算・申し込み書ができあがる予定です。このツアーはチーム・コヤーラ会員とそのお知り合い（会員やスタッフの紹介があれば非会員でも OK）を対象に企画されており、公に募集いたしません。ご関心のある方に案内書と申し込み書をお送りしますので、羽関オフィスまでご請求ください。（このツアーのお問合せ×切 8 月末日）このツアーには羽関（添乗員資格有）が同行いたします。

企画・問合先 羽関オフィス（担当はぜき）

189-0003 東京都東村山市久米川町 3-27-57

TEL042-395-7547 FAX042-395-7975

email hazeki@nonc.jp

手配旅行会社：株式会社マンデラ

（東京都知事旅行業免許 3－6 5 7 5）

101-0048 東京都千代田区神田司町 2-19-3

丸越ビル 5 階

TEL 03-3518-9388 FAX 03-3518-9387



「ラ・スコペラ」※写真はイメージです。
Museo di Storia Naturale di Firenze, Zoologia "La Specola", Florence, Italy



「KOYAALA 通信」は、チーム・コヤーラがコヤーラ・クラブ会員に発行するニュース・レターです。年 4 回発行 発行日（予定） 1 月 1 日、4 月 1 日、 7 月 1 日、10 月 1 日

創作人形論を問う。

現在と未来の人形を語るには、過去の人形論を振り返ることなくしては語れない。月光社を主宰するつじとしゆき氏はその試みを論考にまとめた。今号と次号ではそのダイジェストを紹介する。

また今回は、最近の創作人形界について思うことを語っていただいた。（インタビュー 羽関チエコ）

人形論の不在

一昨年も今年も人形公募展が連続してありますね。つじさんは今の状況をどうご覧になりますか？

「最近の公募展を見ていると、その時代やその先において重要な作家を選ぶという視座に欠けていると思うことがあります。そこそこうまい人が選ばれる傾向にありますが、それだけで公募の意味って体现できるのかな、という謎がいつも残ります。

90 年代から創作人形が盛んになりましたが、現場に即して考えると、2000 年代以降は人形のお店の力が落ちてきて作家はインパクトのある活動ができない。だから自分の好きなファッションブランドのお店に置いてもらうような動きもでてくる。すると人形の持っていたある種シリアスな部分を受け止める存在がなくなってくるんですね。そういう状況で、公募展の主催者たちは、将来の理想を語れるほどの人形論を持っているのでしょうか？ それが曖昧な状況で、主催者が公募展の応募者に頼る状況だとすれば、いかなるものかと思う」

一公募展における人形論の不在。全てに当てはまるわけではないと思いますが、それは私も感じています。

【めごい】と【むごい】

一つじさんの人形論とは？

「90 年代以降拡がった人形の概念の拡がりの中で、創作人形とは何か？ 創作人形作家は何をするべきか？ という問題が深まっていったように感じていました。そんな時、柳田國男だったと思うのですが、【めごい】（＝愛しい）と【むごい】（＝酷い）は元々ひとつの言葉だったという文がありまして、驚きと同時にこれが自分の考える創作人形を表す一番シンプルな言葉かなと思いました。

（四谷）シモンさんの〈解剖学の人形〉や（辻村）寿三郎さんの〈広島より愛をこめて〉はその感情を感じる代表的なカタチをもっている作品だと思います。

【めごい】と【むごい】という言葉が分かれる時代に目を移せば命の依代として壊される運命にあった人形と、飾り物として豪華になっていく人形の分かれ目を想像します。工芸的な流れを振り切って新しい表現を模索したパイオニアたちは無自覚に長らく忘れられていた【むごい】の要素を取り込み人形が本来持っていた魅力に迫ろうとしたのではないか？ というのがもとの発端となる発想です。

そのアイデアを元に、自分なりに 60 年代からの創作人形の流れを俯瞰してみました。（次ページ参照）

一つじさんの人形論は興味深いです。つじさんがエボックという言葉を使って捉えた四谷シモンさんや吉田良さんの解釈の切り口はユニークだと思います。

人形のパワー

「僕や上の年代の人達とでは共有できる人形観や歴史がありますが、今の若い人達は、たとえばシモンさんの人形をどう評価してよいのか、わけがわからないという。だからこそ形だけの問題でも、自分たちが求めた概念をある程度言語化しておくべきだと思いました。

―確かに体系的な記録や人形論がないと、人形作家の活躍が歴史として残らないですね。

「人形を作ることって一種の病みたいなものじゃないですか。たとえば寿三郎さんの縮緬の人形が表す情念の世界、与勇輝さんなら昭和の寂しそうな表情。そうやって、個々の作家が発見したものがある。そういう創作人形のパワーを、今、伝えないとならないと思います」

―シモンさんについては、古代の人形との関連性を書かれてますね。
「人形の起源を調べたとき、世界最初の土器が人形だったということを知りました（注）。使い道がはっきりしている一次的な道具と使い方がわからない二次的な道具で、二次的な道具であった人形が人類初めて作ったものだということです。僕はそこに人形が本質的に持っている力を感じます。役に立つことよりも先に、祈ることとか愛する、愛玩することを見つけて、当時はそれを持って歩いていたらしい。
それはシモンさんの人形をみて、漠然と思っていたことです。だから今のこの短い時間のあいだで人形のことを考える前に、2 万年のスパンで人形が存在したことを、誇りをもった方がいいと思っています」

―今現在の状況は、エボックの切り口で語るのは難しいですね。
「人形はファッションでいいという価値観もできて、人形本体に対する意識の変化も見られますね。たしかに今は混沌としています、そのなかから無意識に次のエボックが現れてくる可能性がある。なにしろ、僕たちは人形というモノへのアプローチを無意識にやっているのですから」

サクセスとは？

―ところで賞にあわせて作風を変える、いわゆる賞ねらいの傾向を、どう思いますか？

「賞歴を作って、自分を認めてもらいたいという素朴な感情はしょうがない。それは責められないと思います。それに各賞に順応して技術を変えられることができるなら、作家のスキルとして受け取ることができます。でも、人形作家にとってのサクセスって何なんだろうって考えると、人形でご飯食べられることなのか、人形作家であるということに誇りを持てることか、その価値をどちらに求めるかということですね。コヤーラは後者を求めるほうだと思うのね」

―確かにその線です。つじさんにはチーム・コヤーラの創作人形展の講評をして頂きますが、公開講評枠の応募者にメッセージはありますか？
「自分が判断に困るくらいの挑戦的な作品がくると、いいですね！」

※注 チェコの南ドルニ・ヴェストニツェの遺跡から発見された BC29000～25000 の裸婦の粘土人形

つじとしゆき
人形製作ユニット「月光社」を主宰
1968 年生まれ 月光社における人形ボディ製作全般を担当
1996 年に月光社として作品発表以来、個展・グループ展出展多数
2000 年 International Doll Artistry(ドイツ)
2004 年 球体関節人形展（東京都現代美術館）
写真（本頁・次頁）:2012 年月光社個展「the concept of yong」（2011 年）より

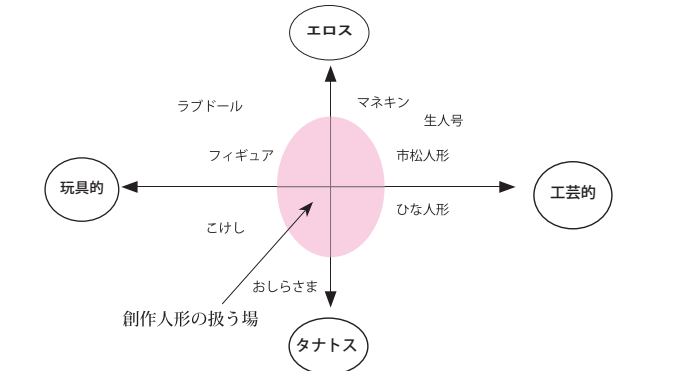
近代から現代にいたる創作人形の流れ（試論）

ー球体関節人形を中心にー
(つじとしゆき「創作人形概論」草稿より) 前編

近代から現代に至る人形の流れ

平田郷陽らの工芸へのアプローチから創作人形の流れが始まる。
近代の人形の状況：
創作人形は伝統的人形のスタイルを改めて、新たな伝統としてのスタイルを創造し人形の概念を広げていった。
背景：
手作りの作品が工業製品のひながたになる・ドイツのビスクドールがセルロイドの工業製品となる・工芸的アプローチが伝統的な技術に新しいモチーフを提供（日展など）・生人形が平櫛田中のようなアプローチを近代木彫に提供もした・中原淳一はイラストや自作の人形で人形とそれを取りまく少女世界をイメージの総体として提示、フランス人形やリカちゃん、少女漫画の原作イメージに幅広い影響を与えた。

では現在、創作人形とよんでいるものは、なんだろうか？
・人形のもつ二つの極
1 機能：玩具的↔️工芸的 / 2 表現 : エロス↔️タナトス



このようにみると、「創作人形とは玩具的、工芸的アプローチを否定し、エロスとタナトスを同時に扱う人形の一群」であるといえる。

- ・球体関節人形を扱う意味
日本の現代の創作人形の世界の拡がりは、球体関節のイメージや機能に由来する例が多いため、ここでは球体関節人形について言及する。
例 スーパードルフィー、アニメ「イノセンス」、マリオ A の写真、宮崎ノリやトレヴァー・ブラウンのイラスト、ボールジョイントドールの海外での受容。
- ・論考の前提として：人形の使用目的とは
飾るもの（インテリアとして、権威、豊かさの象徴として）／遊ぶもの（全能感をみたずものとして。母体の代わりとして。社会性を身につけるものとして）／祈るもの（呪術にもちいる形代として、おまもり、招福の象徴として）
- ・上記の特徴に近い特性をもつものとして；仮面（古い彫刻にも近い特徴をみることができる）

創作人形は伝統的なスタイルからエポックを作り出す（革新性＝エポック）。エポックは過去の作品がもつスタイルを素材や概念、またその複合的なものの問題として乗り越えたとき現れる。これより個別の作家を見ることによって、創作人形のエポックについて書いていく。

ベルメール

ベルメールは球体関節人形に大きな影響を与えた作家といわれている。しかし人形師達が人形そのものに意図をこめるのに対し、ベルメールは写真にその意図をこめた。

人形師達は人形自体を発表することのみが意図の発露であったのだから、イメージの為の人形制作は人形の歴史にとってエポックなことであった。人形を見るものの心象、人形から受け取るイメージ、作者自らの欲望の投影としたこと、このことをもって人形はカタチの問題から解き放たれたイメージとしての実体をもつこととなった。

四谷シモンと吉田良

日本の球体関節人形は四谷シモンらがベルメールの人形写真を見て衝撃を受けたのをきっかけに始まり、吉田良ら第二世代に受けつがれたといわれている。
日本の人形作家にあたえたベルメールの人形を、二人の作家の作品をもとに考察しようと思う。
・両者の違い

	シモン	吉田
素材	桐塑・胡粉彩色	石塑・油彩
写真	篠山紀信ほか	吉田良
表現	主に立像	立像・ポーズ
モチーフ	自分自身・機械	娘など 妖精

上記の事を勘案すると、むしろシモンドールはベルメールのとはいえない印象すらある。ではシモンはベルメールの何に衝撃を受けたのだろうか？

四谷シモンのエポック

シモンの初期の人形は伝統的日本人形の影響がある。当時は朝日新聞の現代美術人形展が注目をあび、人形における表現力が競われ、それは後年辻村寿三郎、与勇輝などを輩出するグルーブグループが発足するきっかけともなった。
しかしシモンは、工芸として確立した人形の閉塞性をやぶるために、伝統的人形の技法をベースとして、新しいモチーフを与えることとして人形のエポックを作ろうとした。自分自身をモチーフとするというアイデアで。
自身を作るということは、それは私小説的ということもできる。これがシモンのエポックといえるだろう。

呪術としての人形

四谷シモンが登場した 1970 年代とは；
アングラ全盛、原初的な表現を探る舞踏、岡本太郎（万博会場で反近代、原始的な日本の美意識を提示）
シモンはこのような時代の空気から、ベルメールに古代の呪術のようなものを感じ取ったのではないだろうか？ベルメールの解体された人形は古代壊されるためにつくられた土偶の機能を彷彿とさせるし、そのふくれた球体の腹部もそのカタチの相似とみることができる。土井典もベルメールからの影響を、その呪術的なカタチ（土偶のような）として受け入れたのではないだろうか？
シモンの作品に立像が多いことも呪術的モチーフとして見ることもできる。
すなわち、立像への執着を近代人形における呪術性の再興ととらえる。シモンがたびたび、神について語るのは自身のモチーフと人形のもつ呪物との関連として読みとくことができるかもしれない。

(後半は次号掲載)
※上記はつじとしゆき氏の「創作人形概論」の草稿をダイジェストにしたものです。
(編集：羽関チエコ)

これから開催される国内公募展情報（2013 年～ 2014 年 1 月開催分）

公募展名	創作人形コンクール M I D O W展 2013	ドールシンフォニー in 京都 Vol.4	第 1 回クラフトアート人形コンクール
テーマ・方向性	リアルな形ではなく、リアルな気配をもとめて	京都で唯一の一般公募による創作人形展 賞レースではありませんが、事前審査による 40 人限定の展示です。創作人形であれば、ジャンル・素材は問いません。	～より多くのファンに人形を届けたい創り手のための スカウト&マーケット～ 人形作品を、ごく限られた従来の人形ファンに見せて 終わりではなく、人形ファンを増やし、対価を払って ご購入いただくことを意識して活動しておられる方を 対象にしています。
会場名	御堂筋ホール心斎橋	京都府立京都文化博物館 5 階ホール全室	大丸心斎橋店 本館 7 階催場（予定）
住所	大阪市中央区西心斎橋 1-4-5	604-8183 京都市中京区三条高倉	大阪市中央区心斎橋筋 1-7-1
会期	2013 年 11 月 3 日（日）～ 11 月 5 日（火） 11:00 ～ 18:00 (最終日 ～ 16:00)	2013 年 9 月 13 日（金）～ 9 月 16 日（月・祝）	2014 年 1 月中旬（予定）
主催者名	アール・リベ人形学院	ドールシンフォニー in 京都実行委員会事務局	株式会社マリア書房
代表者名	三上りあん	江川イサム	代表取締役 高野明子
間・応募宛先	661-0003 兵庫県尼崎市富松町 4- 7- 3 アール・リベ 三上りあん tel 090-5978-5611 email lien@art-reve.com	612-8438 京都市伏見区深草フチ町 1-3（株） 亥辰舎内 TEL 075-644-8141 FAX 075-44-5225 email ningyou@ishinsha.com	〒 602-8014 京都市上京区室町通り下立売上る 株式会社マリア書房 クラフトアート人形コンクール 係 tel 075-432-1201 fax 075-441-2923
応募費用	M サイズ 直径 60cm × 高さ 90cm = 10000 円 L サイズ 直径 90cm × 150cm = 15000 円	審査合格者：35000 円 (設営撤収委託費用別途 5000 円)	エントリー 一人 2000 円 1 次 審 査 通 過 者 出 展 料 単 体 出 品：5000 円 / 1 体 1 ブース出展：30000 円 1/2 ブース出展：20000 円
website URL	http://www.art-reve.com	http://ishinsha.com/	http://mariashobo.jp/news/ningyo_concour/
応募方法	応募要項に申込金 5000 円振込票コピーを貼付、 過去作品写真を同封、お申し込みください。	規定のエントリー用紙と規定の写真を送付	F A X または郵送
メ切	1 次募集：写真審査 メ切 5 月 31 日 2 次募集：特例として出展作品写真での応募が 認められる場合もあります メ切 8 月 31 日	6 月 30 日	7 月末日エントリー締切 (書類審査期間は 10 月 1 日～ 11 月 15 日)
審査員名	山本じん（画家・立体造形作家） 星埜恵子（映画美術監督・空間デザイナー） 山吉由利子（球体関節人形作家） 石山ヒロ子（ポーズ人形作家） 企業賞審査員：(株) パジコ 木村進 マリア書房 高野明子 ギャラリーアラビク 森内憲 以上 7 名	ドールシンフォニー in 京都実行委員会事務局	青山恵一（昔人形青山 /K1 ドラブル・京都） 石村明日香（セレクトショップ京・京都） 伊藤愛（万画廊・東京） 太田千花（銀座人形館・東京） 柴田悦子（柴田悦子画廊・東京） 西田考作（西田画廊・奈良） 馬場美和子（ギャラリーぶんかとう・福岡） 渡辺良隆（乙画廊・大阪） 大丸松坂屋百貨店美術担当バイヤー マリア書房編集部
審査部門	部門枠を設けず、より自由な発想の作品を求め ます。	なし	部門なし
賞・賞金	大賞 10 万円 2 位 5 万円 3 位 3 万円 企業賞（3 点） 入選（10 点）	なし	各審査員賞（各 1 名） ファン賞（人気投票 1 名） マリア書房賞（1 名）
副賞・特典	賞状	展示スペース 90x90cm を提供、展覧会図録掲載 (1 冊進呈)、レセプションパーティ招待（9/12 本人のみ）	審査員賞：審査員のギャラリー・ショップでの展覧会 開催権利 マリア書房賞：「クラフトアート人形」表紙掲載
審査方法 1 次	写真審査。過去の代表作品で応募。	書類・写真	書類および写真
審査方法 2 次	1 次に応募していない方が対象。素材や形態や 表現法の多様化を図る目的で募集。よって 1 次 応募作品に無いものが通過しやすいが、2 次は 1 次よりは多少門は狭くなります。未完成でも可。	なし	個々の作品のクオリティ 展示上の演出 作家本人による説明や販売姿勢
次回開催予定 主 催 者 の ア ピール	2015 年予定 コンクール方式を方便とし、常に新しい風が吹 く実験的な公募展を目指します。 人形の正体を簡単に分かることをせず、愛玩の 楽しさも暗喩なる厳しさも、その真逆をゆれ続 けられる体力と成熟をこそ目的とします。腕 1 本の表現も人の心象として人形と定義するユニ ークな公募展です。	未定 作者自身のオリジナルの具体であり創作人形 (動物を含む) であること。プロ・アマチュア は問いません。自身で展示スペース（90cm w x 90cm d) に展示できるものであれば、大きさ・ 点数・素材は問いません。	毎年 1 ～ 2 月（予定） 審査では「販売」の場においてどのような作品を提示し、 ファンを獲得できるのか、作品のクオリティはもちろ んのこと、作家自身がお客様とどう向き合い作品を送 り出していくのか、その過程も含めて評価いたします。 そのため出品作品はすべて展示即売可能なものに限り、 搬出おおよび初日の来場を義務付けています。▽まだ 購入されるレベルではない▽もっと作品を自分の中で 熟成させたい▽趣味の領域で発表していきたい▽作品制 作点数が極端に少ない▽ビジネス目線ではなく芸術家 による評価を得たい、といった方には本コンクールは おすすめできません。